

神戸大学総合ボランティアセンター

1995年5月10日設立

○8つのセクション

- ・手話サークルぺんぺん草
- ・とんかちセクション
- ・住之江児童館セクション
- ・障がい者セクション
- ・まー君チームセクション
- ・点訳セクション
- ・灘地域活動センター（N.A.C）
- ・灘チャレンジ実行委員会



ぺんぺん草 手話歌六甲祭にて



とんかちセクション活動の様子



児童館夏祭りおよびクリスマス会



まー君と散歩



大盛況な灘チャレンジ2024の様子



新歓の様子

○当団体の目的

1. ボランティア活動の推進

地域社会の学生ボランティアのニーズをくみ上げ、一人でも多くの神戸大学生に、ボランティア活動を始めのきっかけを提供する。

2. ボランティア活動のための環境整備

個々のボランティアが長期的かつ円滑に活動するためのコーディネートを行うと同時に、ボランティア保険や福祉的技術のレクチャーなどを提供することにより、安全かつ効果的に、学生がボランティア活動に従事できる環境を確保する。

○総ボラのあゆみ

1995年

1月17日 阪神・淡路大震災

5月10日 神戸大学総合ボランティアセンター設立

- ・仮設住宅でのボランティアやサロン活動を行う
- ・月見山自治体での活動開始(後のとんかちセクション)
- ・点訳や障がい者セクションの原型もできる

6月 第1回灘チャレンジ開催

2000年頃

現在の8セクションが揃う

- ・生田児童館、八雲児童館、セ・ラ・ヴィ(老人ホーム)など多岐にわたる活動が展開される

2017年

生田川児童館セクション、八雲児童館セクション休止

2024年

生田川児童館での活動再開

9月15日 第30回灘チャレンジ開催



灘チャレンジ実行委員会

1995年6月4日第1回開催

当時、神戸大学学生救援隊所属の中北が委員長となり「復興祭—NADA Challenge—」が開催された。
“復興祭”がメインタイトルで、“NADA Challenge”はサブタイトルであった。サブタイトルには、
灘のまちづくりに、学生が住民と共にチャレンジするという意味が込められている。

1995～2001 灘チャレンジ初期

- ・1995年6月4日 復興祭—NADA Challenge— 開催
中北委員長の下、六甲八幡神社（現在駐車場となっている場所）で開催される。約3,000人の来場者を得た。
- ・1996年6月 NADA Challenge 開催
内野委員長の下、1995年と同じ場所で第2回が開催される。この年は、神戸大学総合ボランティアセンターとの共催という形で開催される。
現在の灘チャレンジ実行委員会は、学生震災救援隊と総合ボランティアセンターの2つの団体に所属する形となっており、1996年のNADA Challengeがその始まりとなっている。
- ・1997年6月 NADA Challenge 開催
過去2年で開催場所としていた六甲八幡神社の場所が駐車場として整備されたことから、会場を都賀川公園に移して開催される。
この年から助成金を得ることができなくなり、水道筋商店街などから広告協賛をいただくことが始まる。
- ・1998年～ 灘チャレンジ 開催
祭りの名称が“NADA Challenge”から“灘チャレンジ”に変更される。
98年は大和公園に開催場所を移したが、99年以降は毎年都賀公園で開催されるようになる。
1995年の復興祭—NADA Challenge—から、毎年寸劇が公演される。

「復興祭」としての灘チャレンジ

「人と人とのつながりやコミュニティづくり」の灘チャレンジ

「コロナ禍」の灘チャレンジ

2008～2018 灘チャレンジ

- ・2008年6月1日 灘チャレンジ2008 開催
社会問題を題材とした風刺劇の公演が灘チャレンジのメイン企画となってきた。この年は夜間中学を題材とした劇。
- 2008年7月28日 都賀川水難事故
2009年の灘チャレンジ以降、都賀川水難事故の継承活動が展示等の企画で毎年行われるようになる。
- ・2016年の灘チャレンジより、消火器を使った消火訓練体験企画を開始
- ・2018年の灘チャレンジ2018では、10,000人の来場者を得る。
- 2019～ 灘チャレンジ
- ・2019年の灘チャレンジ2019が雨により中止
- ・2020年 都賀川公園での開催を断念し、12月にオンライン上での企画を計画。“オンライン灘チャレンジ”を実施。
- ・2021年 都賀川公園での開催を断念し、冊子「なだなんだ」を発行。
- ・2022年 4年ぶりに都賀川公園で開催。

震災から29年 何を受け継いできたか

私たち灘チャレンジ実行委員会は、阪神・淡路大震災の復興祭として始まったお祭りである。この第1回の灘チャレンジは、震災直後の1月23日に設立された「神戸大学学生震災救援隊」の1つの活動として実施された。設立当初の震災救援隊は、テント村など公的な救援が届きにくい場所にいる人への支援であったようだ。こういった内容は震災救援隊が独自で発行していた“救援隊通信”の第10号に記載されており、そこで当時の代表が、ともに協力した社会人や活動家への感謝の言葉が記されており、地域の人とのつながりがあったことが読み取れる。灘チャレンジもそういった“地域とのつながり”の中で誕生したお祭りで、学生が主体となって作り上げていくお祭りであるが、実態としては学生と地域の人々が5:5の割合で関わっており、地域とともに作り上げるお祭りであった。

2000年代に入って、灘チャレンジが“復興祭”という文字通りの性格だけで継続していくことに疑問を持つようになった。灘チャレンジは1996年の第2回開催から、震災救援隊と神戸大学総合ボランティアセンターの共催という形で運営されてきたが、2001年度の終わりに総合ボランティアセンターが灘チャレンジの取り組みを放棄しようとする動きがあった。結果として現在に至るまで灘チャレンジは総合ボランティアセンターの1つのセクションとして存続しているため、実際に放棄されることにはならなかったが、灘チャレンジの開催理由を考え直すきっかけとなった。そして灘チャレンジは“復興祭”に加えて、“復興の過程や復興そのものから見えてきた問題を発信する場や、祭りを創る人と来場者との交流、さまざまなものごとに出会うきっかけとしての場”などといった性格が強くなっていった。祭り当日には、問題を発信する場として「寸劇・風刺劇」が継続して公演されたり、地域で活動しているボランティア団体などに模擬店の出店をしてもらっていた。

そして現在、新型コロナウイルスの流行によってこれまで創り上げてきた地域との関わりやOB・OGとの交流がなくなってしまったことで、これまでの灘チャレンジがどのようなことを大事にしてきたかといったことが受け継がれることがなくなってしまった。2022年に4年ぶりに開催された灘チャレンジは“コロナ禍からの復活”を前面に押し出したお祭りで、今年度開催した灘チャレンジ2023は、2010年代の開催規模に回復させることに注力する形となった。

灘チャレンジは震災発生からの経過やその時々々の社会情勢に合わせて内容が変化していったが、ここまで29年で一貫していたことは、第1回開催のサブタイトルに込められた「灘のまちづくりに、学生と住民がともにチャレンジする」ということをその時代の学生が意識して祭りを企画・運営してきたということである。

左から灘チャレンジ2008、灘チャレンジ2013、灘チャレンジ2015



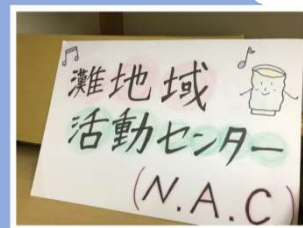
灘チャレンジ2023

灘地域活動センター

設立1997年4月

設立のきっかけ・活動内容

阪神淡路大震災ののちに避難所などで支援活動を行っていた学生組織が前身となり、1997年に灘地域活動センターが設立され、1999年から現在の活動場所である兵庫県営岩屋北町住宅とHAT神戸灘の浜で活動することとなりました。コロナ禍で一時中断されていた時期もありますが、25年以上にわたってお茶会・戸別訪問活動による住民さんとの交流活動を続けています。



毎週末に二か所の集会所でお茶会を開催し地域の住民さんと交流する活動を主として、そのほかに季節ごとのイベント・レクリエーション企画を行ったり、年賀状の送付を行ったりもしています。



お茶会では、毎回15～25名ほどの住人さんに参加いただいております、飲み物やお菓子を食べながら住民さん同士や学生との会話を楽しんでいただいています。



お茶会に参加されるのは地域のご高齢の方が中心で、足腰を悪くされて外出の機会が減ったり、ご家族と離れて暮らしており支援が得にくい状態にあたりする方に、地域住民同士・あるいは学生との交流・関係性の構築の機会を提供することが活動の主な目的です。



神戸大学学生震災救援隊

1995年1月23日設立

発足当時の救援隊(1995)

神戸大学は生協食堂、農学部、国際文化学部体育館などが避難所になった。大学生協あてに届いた物資を用いて学生が自主的に炊き出しを開始。その後、1月23日に同じ大学生協に避難していた学生を中心に「神戸大学学生震災救援隊」が発足



地震を跳ね返す耐震構造の人間関係を作る

大規模災害では、通常の行政が可能なサービス提供量をはるかに上回る被災者のニーズが発生する。そのため「自助・共助」が重要となり、それを実現するためには「日常的に地域の人同士間の横のつながり」が必要である。このような横のつながりを実現するために「市民とともに、市民のひとりとして」町に関わろうとする学生が集まっているのが学生震災救援隊



学生震災救援隊の隊員たちは、地域住民の方や避難者の方と協力しながらお風呂運営や炊き出し、テント村パトロール、子供たちの学習支援などのボランティア活動を行った。



耐震構造の人間関係

学生

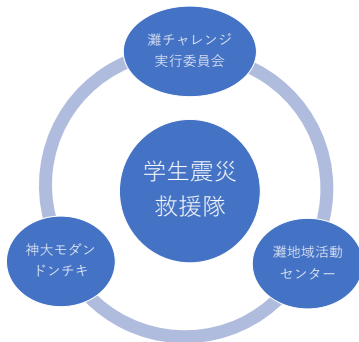
- 学生同士のつながり
- 学生と地域の人とのつながり

地域

- 地域人と地域の人とのつながり
- 地域と行政のつながり

現在の救援隊(2024)

現在の学生震災救援隊は阪神・淡路大震災からの復興祭である灘チャレンジ、隔週土日でHAT神戸と岩屋でお茶会を開催する灘地域活動センター、全国各地でチンドンの演奏を行う神大モダンドンチキ3団体と連携して活動を行っている。学生震災救援隊は主に震災継承イベントの開催、水害や地震の被災地へ赴き足湯などのサロン活動を行う。



令和6年能登半島地震被災地での支援活動

令和6年1月1日に起きた能登半島地震の被災地である石川県輪島市、七尾市で支援活動を行いました。この活動は現地で活動している被災地NGO協働センターの協力と現地の七尾市中島区の集会所からの支援要請があったため実現したものです。



現地では足湯で現地の方と交流を行い、現地支援のニーズを把握しました。また、被災された住宅で瓦礫などの片付けの手伝いをさせていただきました。

神戸大学ボランティアバスプロジェクト

2011年4月30日設立

設立のきっかけ

東日本大震災発生直後から

「被災地に何かできることはないか」という多くの学生の声が大学に寄せられたこと

をきっかけにボランティアバスが派遣され、23名で岩手県大槌町、陸前高田市を訪れました。

目的

東日本大震災の被災地に継続的に神戸大学生を送り込み、被災者に寄り添う活動を行い、被災者の自立を支援し被災地の早期復興を図ること

震災後避難所や仮設住宅で生活されている方々へのケアを中心に実施。



参加者の声

今回参加して感じた事は、継続的な支援の重要性だ。現地の方はよく、「忘れられることが一番怖い」「ボランティアが来てくれるだけで嬉しい」とおっしゃる。「私達は忘れていません」このメッセージを届けるために、これからも現地に通い続けるつもりだ。

ほんとに何の変哲も無いところに津波がきて、「この町を特別にしてしまった」でもだからこそ、自分が来てこの町が好きになって、僕にとって特別になった。僕にとっては何より会いたい人がいるのと、ご飯が美味しいのと会いたい仲間が居る場所が陸前高田です。

初めて東北に行きましたが、思ったよりも復興が進んでいないというのが最初の印象でした。

目的

阪神・淡路大震災の被災地域でのボランティア活動を通して当該地域に貢献する。また、震災やその教訓について学び、学生企画の防災プログラムの実施や震災伝承を通して、しなやかなまちづくりに寄与する。

将来予測される災害に備えるため、東日本大震災の被災者の声を神戸で語り継いでいく。そのために、語り部の担い手となる学生を育成する。

岩手県大槌町で行われているお祭りに学生を送り込み、祭りの盛り上げに寄与する。また東北の文化を神戸で広げ、東北に関心を持つ学生を増やす。

また、神戸で得られる阪神・淡路大震災の語り部活動に関する知見を東北の方々に提供し、震災を経験していない者としての語り部のあり方を共に模索する。

参加者の声

震災についてだけでなく震災の前、そして震災が起きてから今も続く暮らしについても考えるきっかけがうまれた旅だったと思う。私たちがすぐに今の日本の防災意識を変えられるわけではないと思うが、考えることをやめてはいけなと強く感じた。

私の地元は絶対に津波が来ないので本当に実感が湧かなかった。ただそんな中で当事者意識を持った防災活動をするにはどうすればよいのか、一人一人の行動から始まるのだろうが、悩んでまだ答えや解決の糸口が出ていない。

大川小学校で語り部の方が経験に血を通わせる事が大切と仰っていて、戦争やほかの災害でも報道では被害の人数や被害の状況を伝えるだけだが、被害にあった人にもそれぞれの人生があることを忘れない事が大切だと感じた。



設立当初

現在

震災の語り継ぎ・大学生の交流

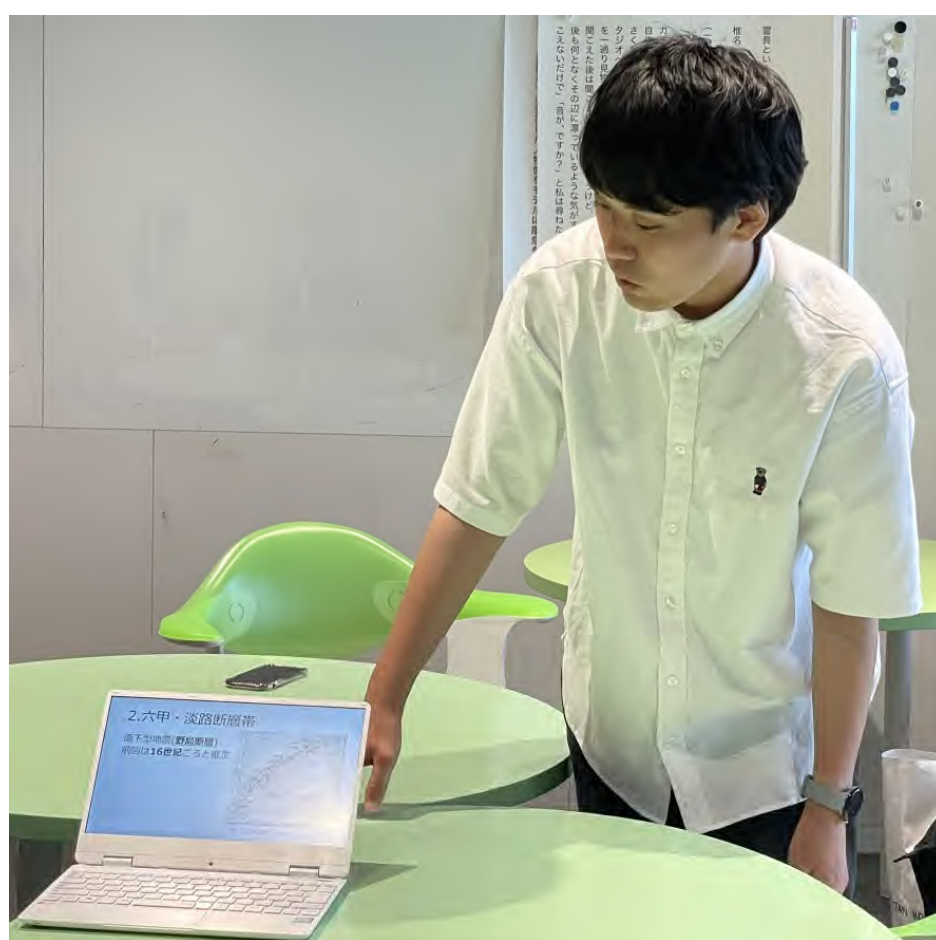
神戸大学ボランティアバスプロジェクトは、東日本大震災、阪神・淡路大震災をはじめとする震災について学んでいます。学んできたことを、自分たちの中で終わらせるのではなく、語り継いでいくことが重要だと考え、語り継ぎ活動を開始しました。同じく語り継ぎ活動を行っている東日本大震災被災地の大学生皆さんと定期的に交流を続けています。

阪神・淡路大震災の学び・語り継ぎ

1995年に阪神・淡路大震災が発生し、30年が経過したことで震災の記憶の継承が課題となっています。簡単に語り継ぐことはできません。震災について様々な方のお話を聞き、自分達でも学びながら、注意深く語り継ぎ活動を行っています。



震災の語り継ぎ ～東北大学SCRUMとの交流～



東北大学SCRUMの皆さんと、2024年2月から定期的に交流をさせていただいています。初めは宮城県南三陸町の旧大川小学校での語り部を聞かせていただき、女川町でまち歩きを行いました。8月には、宮城県名取市閑上地区で震災遺構をめぐりました。その後、せんだいメディアテーク内に移り、今度は私たちが、阪神・淡路大震災に関する語り部を実施しました。同じ震災伝承を行う仲間だからこそ、苦楽を理解し合い、楽しい時間を過ごすことができました！



神戸の活動

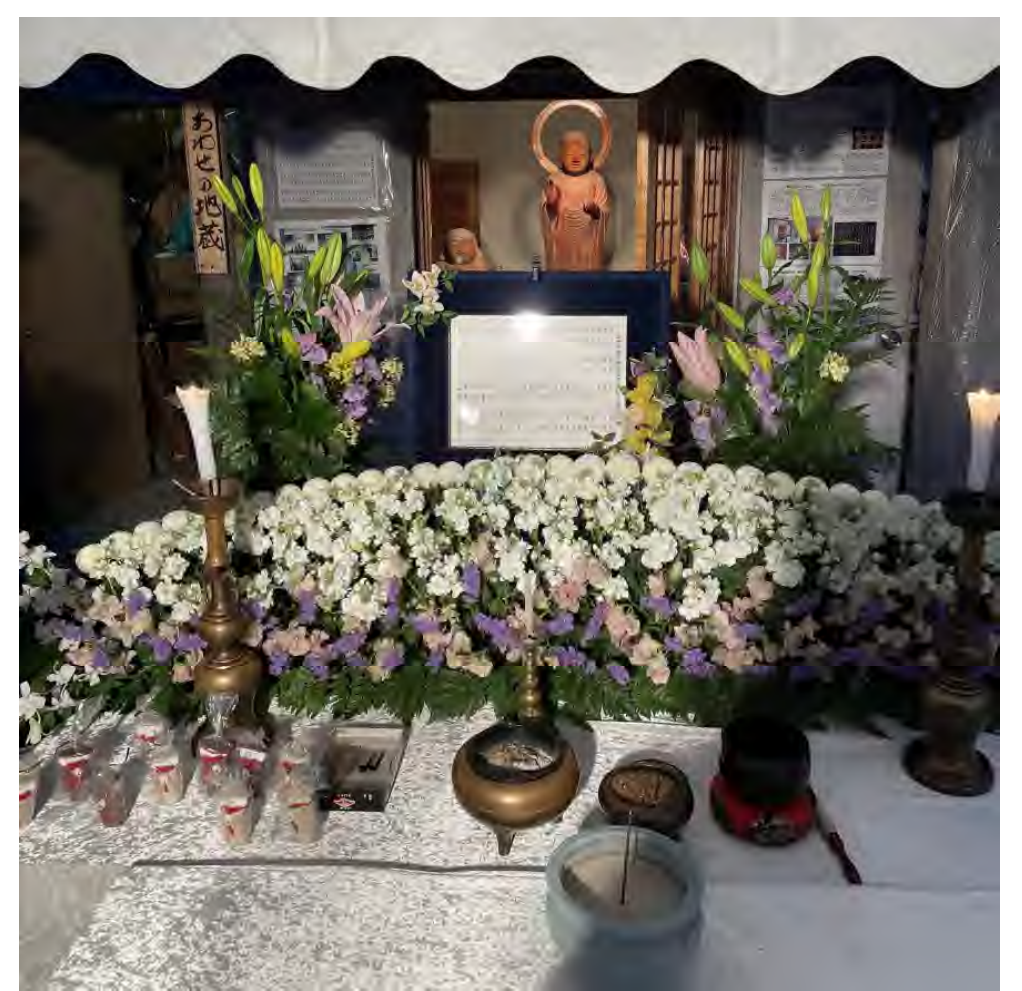
神戸大学ボランティアバスプロジェクト

令和4年度に東北地方でのコミュニティ支援に一段落をつけ、私たちは新たな活動の形を模索しました。そうして、大学の地元、神戸で阪神・淡路大震災について学び、震災伝承につなげる活動を開始しました。現在では大きく分けて2つの場所で活動をしています。

神戸市長田区日吉町5丁目での活動



阪神・淡路大震災では、長田区の日吉町5丁目は家屋の倒壊や火事などによって甚大な被害を受けました。現在、地域コミュニティがとても活発で、様々な行事が行われています。8月地蔵盆、12月餅つき、1月の慰霊祭などを中心に行事のお手伝いをしています。



1.17KOBEBEに灯りをinながたでの活動



長田区では阪神・淡路大震災を慰霊する大きな行事が現在も続けられています。様々な立場の方がこの行事に思いをかけてこられました。私たちは実行委員会の一員として小学生への講話活動や、この行事の記憶を残していく活動をしています。



第1次能登震災・水害派遣

神戸大学ボランティアバスプロジェクトは2024年9月28日（土）～30日（月）の3日間、石川県輪島市へ派遣を行いました。学生3人は石川県の災害ボランティアに登録し、参加されたボランティアの方々とボランティアバスで現地に向かい、震災・水害からの復興支援を実施しました。

9月29日の活動

輪島市輪島、河井町での活動
河川の氾濫による浸水被害
床下の泥をかく

→下水が混じった臭気、土ぼこり
住宅の引っ越しお手伝い
弁当屋の冷蔵庫の整理、清掃
→腐敗した食物、浸水被害
・がれきの運搬、撤去



9月30日の活動

昨日に引き続き、弁当屋の清掃
泥のかき出し、フライヤーの掃除
調理器具類の泥落とし



神戸大学持続的災害支援プロジェクト

Konti

ーこれまでー

2016.4～
熊本地震 Konti設立 / 第1次-6次熊本派遣活動
2017.4～
第7次-16次熊本派遣活動
Konti meets Bousai / Konti meets Global
Konti meets Beach / Konti meets Hoiku
Konti meets Media / Konti meets Agri
Konti meets Person
2018.4～
第17次-28次熊本派遣活動
兵庫県丹波派遣活動
第1次-13次岡山派遣活動
Konti meets Community / コミュニティミーツ怪談
Konti meets Contexts / Konti meets Place
2019.4～
第29次-35次熊本派遣活動
第14次、15次岡山派遣活動
2019.11～
第1次-3次宮城派遣活動
Konti meets 1/17 / Konti meets Home
2020.1
1.17 → イッテンイチナナカラ
第4次宮城派遣活動
2020.2
第36次熊本派遣活動
第5次宮城派遣活動
2020.3
第37次熊本派遣
2020.10
第6次宮城派遣活動
2020.11～2021.01
フードバンクはりま
2022.5
第7次宮城派遣活動

ーこれからー

たくさんの方々からのご支援・ご協力のもと、2019年度末をもって熊本と岡山での取り組みは終了を迎えました。今後は、2019年11月から開始した宮城県丸森町での活動と、神戸での活動を中心に精進してまいります。「まち」と、そこに暮らしそのまちを想う「ひと」のジソクを目指し、神戸に住む私たちワカモノ・ヨソモノだからこそできることをしよう。そんな想いを胸に、これからも学生一丸となって自問し、活動に取り組めます。



ーわたしたちー

神戸大学持続的災害支援プロジェクトKontiは2016年熊本地震をきっかけに発足した団体です。「災害をきっかけにまちがよくなる」、「まちへの想いをまちの持続につなげる」ことをビジョンに掲げ、これまで熊本県西原村、岡山県倉敷市、宮城県丸森町、兵庫県神戸市・姫路市にて活動を行ってきました。

ーKontiの活動ー



熊本 西原村

熊本では、2016年から37回にわたり、住民さんと協働で様々な活動に取り組んできました。小さな取り組みを重ねていくことで、暮らす人々がその時々に合わせてデザインできる地域の在り方を模索してきました。



兵庫 神戸市 姫路市

神戸は、Kontiの拠点であり、様々な現地活動を通じて学生が得た気づきや悩みを、これからの更なる活動を考えるためのヒントへと昇華すべく主に講演会「Konti meets X」を開催してきました。2020年度にはフードバンクはりま様との活動も実施しました。



岡山 真備町

岡山では平成30年7月豪雨災害をきっかけに活動を開始し、15回の活動を実施しました。「災害に強いまちを目指したい」という住民さんの声をカタチに変えるべく防災ワークショップを計11回開催し、地域の避難訓練が実現しました。



宮城 丸森町

宮城では令和元年台風19号による被害をきっかけに活動を開始しました。計7回の現地活動を実施し、泥かきや戸別訪問等の活動に取り組んできました。近年はコロナ禍により、オンライン企画を実施するなど、今後の活動の展開を日々模索している段階にあります。今年度はオンラインでの活動は勿論、現地での活動も実施予定です。



KOBE Univ. SUSTAINABLE VONTEER PROJECT KONTI



神戸大学持続的災害支援プロジェクト Konti

〒657-8501 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学 地域連携推進本部

MAIL: kobekonti@gmail.com

能登半島災害ボランティア活動報告

神戸大学医学部医学科3年 Kobe Med Connect

奥珠希 佐藤健生 島津里彩

神戸大学基金からのご支援による「神戸大学生による能登半島地震 復旧・復興 災害ボランティア活動経費助成」制度を用いて、能登半島災害ボランティアに参加しました。全2回の参加概要と各々の体験談や学びをここに報告します。

参加したボランティア

ボラバス型災害ボランティア

石川県災害対策ボランティア本部が募集する、ボラバス型災害ボランティアに申込・参加しました。参加者は金沢駅に集合し、ボランティアする地域の拠点までバスで向かいます。

活動内容

- 被災した家屋の片付け
- 家財の仕分け
- 廃棄物の運搬 等

それぞれの体験

それぞれのボランティア先での体験を通して、貴重な学びや気づきを得ることができ、考え方にも変化がありました。

奥

主に4月に行った1回目の参加について

(4/3)

- 6:00 金沢駅到着・モーニング
- 8:45 金沢駅集合、バス出発
- 10:00 西山PA休憩、友達ができる
- 11:00 ベースキャンプ着、活動場所へ
- 活動① 瓦の回収
- 活動② 被災した住宅の片付け
- 15:30 活動終了、ベースキャンプへ
- 22:00 消灯

(4/4)

- 8:10 ベースキャンプ発
- 9:00 能登サテライト着
- 活動 被災した家屋の片付け
- 13:00 活動終了、金沢駅へ
- 15:30 金沢駅着、解散

自分より体力・経験のある人が行った方が役に立つのでは…？という不安

✓赤ちゃんを連れてお母さんとの出会い

ボランティアの私たちに、何度も「すみません」と言う赤ちゃんを連れてお母さん。「かわいい赤ちゃんですね。」と声をかけると、それだけでこわばった表情が柔らかくなったように見えました。その顔が忘れられません。



いろんな人が集まったチーム。写真は7月の時のもの

参加後の変化

知識も経験も大した体力もない、頼りない自分でも、「そんな自分だからこそこでもできるかもしれない」と考えるようになりました。あらゆる人が被災をしたのだから、あらゆる人が役に立てると気づきました。できる人が、できることを、できる時に関わることの大切さを感じました。

- 被災された方は老若男女・障がいの有無・国籍・出身地関係なく、“ただそこにいた人・住んでいた人”という当たり前のことの気づき
- 様々な得意分野・背景・属性の人が関わる大切さ

ベースキャンプでの不思議な時間



- ✓廃校となった学校を利用して開設
- ✓教室・体育館に寝泊まり
- ✓理科室が談話室に
- ✓4月はまだ断水、トイレは仮設

夜はかなり冷え込んだので、ベンチコートやアルミシートが重宝しました。

プライベートテントには段ボールベッドとマットを用意していただきました

各自夕食を済ませたのち、ふらっと談話室になっている理科室へ。持ち寄ったお菓子を食べながら、「どこから来たの」「普段は何をしているの」「どうしてきたの」「ボランティアは初めて？」と話しました。会社員から高校生まで、なんと自分と同じ医学生もいました。これまで経験したことのない不思議な時間でした。

ボランティアに来ている人たちは、ここでしか会わない、話さない人たち。それでもそこには温かい空気が流れていました。この不思議な時間は、私にとって大切なものになりました。

まとめとメッセージ

- 被災者には様々な人がいるため、多様な属性の人がボランティアに行ったり、関心を持ったりすることが、より柔軟な支援に繋がる。
- 支援の方法、関わり方には多くの方法がある（実際に行く、募金する、ニュース見る、発信する、被災地のものを買う）。
- 9月に発生した水害を含め、被災地の“今”に関心を持ち続けたい。できる形で関わり続けたい。
- 災害に備えて、被害縮小のための対策だけではなく、地域の復興力をあげるための取り組みも必要だと感じた。

行程 1回目

参加者：奥

4/3

夜行バスで
神戸→金沢

能登町で家財運搬ボランティア

ベースキャンプ
宿泊

4/4

能登町で家財運搬ボランティア

帰宅

2回目

参加者：奥、佐藤、島津

7/5

夜行バスで
大阪→金沢

佐藤
奥
島津

輪島市

能登町柳田地区

帰宅

ベースキャンプ宿泊

7/6

島津

柳田で家財運搬ボランティア

帰宅

佐藤

- 6:00 金沢駅到着
- 6:35 金沢駅集合、バス出発
- 9:30 輪島市サテライト着
- 10:00 6つのグループに分かれ活動場所へ
- 1件目：荷物の納屋への移動、廃棄
- 12:30 午前の作業終了、お昼ご飯
- 13:30 お昼休憩終了、再度活動場所へ
- 2件目：屋根裏荷物の撤去
- 15:30 活動終了、サテライトへ
- 16:00 サテライト発
- 20:00 金沢駅着、解散



～グループでの活動～

あだ名をつけたり話題を振ったり、チームの会話を弾ませてくれたHさん
時間管理も完璧でした

被災者の方とよくお話をされ、
気配りがお上手だったMさん
被災者の方も和んでいらっしゃいました

ボランティア19回目の
超ベテラン！
段取りや作業が迅速な
「師匠」ことSさん



最年少！
初参加で慣れだがか力仕事は得意な私

4人グループで2件を周りました。どちらも家の解体のために家財を運びだしました。

災害ボランティアって、
がれきの撤去とか
力仕事ばかり
初心者が行って大丈夫？

- 災害ボランティアは荷物の運搬だけでなく、チームの作業、被災者の方との会話など多彩な要素がある
- 色々な人がいることでチームが向上しより良い活動になるのではないかと

～素人ボランティアの限界～



横転する輪島塗りの会社の建物



朝市は大規模な火事により甚大な被害



道路は所々陥没や隆起をしていました

上の写真は、被災者の方の家に行く途中で撮影したものです。基本的に写真は控えるように言われていましたが、情報発信のためならと許可をいただきました。これらの復興は素人ボランティアの手に負えない案件です。いくら素人のボランティアが入っても、出来ることは倒壊の危険のない場所に赴き、手で荷物を運ぶことくらいであり、無力感を感じました。

また現地は金沢駅から遠く、ボラバス型のボランティアでは1日せいぜい4時間が5時間しか活動できません。

輪島市災害たすけあいセンターの方も、復興を大きく進めるには専門知識、技能を有した介入が必要だとおっしゃっていました。

直接現地で作業ができなくとも、資金援助などで専門的なボランティアの支援をすることも大事だと思いました。ボランティアの方法は1つだけではなく、被災地の刻々と変化する状況によっても需要が変わります。今回の経験は、様々な角度からのボランティアについて考えるきっかけになりました。

島津

1日目 7/5

- 5:45 夜行バスで金沢駅到着
- 6:20 金沢駅集合、バス出発
- 9:30 能登町柳田地区到着
- 被災した住宅の荷物運び出し
- 12:00 昼食休憩
- 15:30 活動終了、バスで移動
- 16:30 ベースキャンプ到着
- 20:00 宇出津あばれ祭に連れて行ってもらう

2日目 7/6

- 8:50 ベースキャンプ発
- 9:30 能登町柳田地区到着
- 被災した住宅の荷物運び出し
- 12:00 昼食休憩
- 他のボランティアさんと交流
- 15:30 活動終了、金沢駅へ
- 18:15 金沢駅着、解散



家の解体のためには、家財を運び出して各自で処分する必要があります。その家財運搬や処分のお手伝いをさせていただきました。由緒あるお家に入らせてもらったり、活動の合間に家主の方からその家の歴史をお聞きしたりすることもできました。



輪島ベースキャンプ
キャンプはボランティアや融資の方によって運営され、備品は支援物資で成り立っていました。教室内の簡易テントと簡易ベッドで宿泊させていただきました。



宇出津あばれ祭
宿泊日が偶然あばれ祭の日だったので、祭に参加させていただくことができました。県外に避難されている方もこの日は能登に戻り、切子を担がれていたようです。

参加前

ボランティアに批判的な報道や意見を見聞きしていたことで、災害援助の経験や専門知識がないと、派遣先で迷惑がられるのではないかと、役に立てることはあるのだろうか、と不安や迷いがありました。

活動中

被災地には、全国各地からボランティアの方、物資、支援金が集まっていた。どの形の支援も必要とされていました。

お金はあっても、物が売っていない
今は寄付金よりも物資がほしい

実際に人に来てもらう支援が一番ありがたい

ベースキャンプの運営者さん

ボランティア先の家主さん

参加後

物資支援、人的支援、金銭的支援はどれも生活を取り戻すために必要だと気づきました。そして、人や場所、また災害からの時間経過や被害規模によって、同時多発的に多様な支援が求められていることを知りました。このことから、どの支援も必要であるため、各々ができる支援をし、それを批判せずたえ合える人でいたいと思うようになりました。

もの ひと お金
すべて必要で、バランスが大事

被災経験のある人、知り合いを亡くした人、耳の間こえない人、各地のボランティアに参加している人etc...。活動中、多様なバックグラウンドのボランティアさんとの出会い、お話しすることができました。一期一会の、地域を超えたつながりを尊び、ボランティア同士でも助け合う雰囲気の中で、貴重な体験をさせていただきました。



阪神・淡路大震災30年記念講演会 次世代へのメッセージ

生きてこそ～1.17を忘れない



阪神・淡路大震災から間もなく30年目を迎えます。目に見える傷跡は無くなっても、人の心に残った傷は、何年経っても癒えないこともあります。

阪神・淡路大震災で、娘である神戸大学生の上野志乃さん（当時発達科学部・2年）を亡くされたお父さんの上野政志さんに、命の大切さ、ご遺族の思い、そして震災の経験から学び続けることの大切さについてお話しいたします。

日時：2025/1/16(木)18:00～20:30

会場：灘区民ホール会議室（オンライン併用）

講師：上野政志さん

兵庫県佐用郡佐用町の元小学校教諭。長女・志乃さん（当時20歳）を1995年1月17日に起きた阪神・淡路大震災で亡くした。「なぜあそこに下宿させたのか」「なぜ家に引き留めなかったか」後悔は募る。その後、震災も娘のことも忘れてほしくないと、体験を語ってきた。「娘を知ってもらうことで、ふと娘が活着ているように思える瞬間がある」。私たちが話を聞くこと、忘れないことが上野さんを支える。



【お申し込み】

右のQRコードから事前にお申し込みください。

オンライン（ZOOM使用）参加可能。

お申し込み時に参加方法をご選択ください。



主催：神戸大学学生震災救援隊 共催：被災地に学ぶ会

お問い合わせ

090-8379-9969(藤室) | hisaichi.ni.manabu.kai@gmail.com

この講演会は神戸大学地域連携推進本部「学生地域アクションプラン」の一環として実施されます。



阪神・淡路大震災から30年 大学生の語り部実践

1995年、阪神・淡路大震災は甚大な被害をもたらしました。当時あったことを、忘れない。震災から30年が経過しようとしており、その記憶を継承しなければならない時期に差し掛かっています。私たちは、神戸・長田で昨年度から地元のお手伝いをさせてもらってきました。今年度から震災の語り継ぎに挑戦しています。

語り部イベントをおこないます！参加無料・自由です！

○日時：令和7年（2025年）1月13日（月）午前11時～

○場所：長田区 たかとりカトリック教会

○話者：神戸大学ボランティアバスプロジェクト

4回生 井上 光起 3回生 野々内 日向

○応援団：FMわいわい代表理事 金千秋、

神戸大学地域連携推進本部ボランティア支援部門特命准教授 山地久美子

○活動内容：金千秋さんから震災のお話を学ぶ。

大学生による語り部の実践（阪神・淡路大震災）

○私たちの活動にもっと興味がある方は以下の連絡先までご連絡ください！

神戸大学ボランティアバスプロジェクト代表：井上光起（国際人間科学部4年生）

E-mail: ku.tohoku@gmail.com

X: @ku_tohoku

右のQRでInstagramのDMからでもご連絡が可能です！

Instagram: [@tohokuborabasu](https://www.instagram.com/tohokuborabasu)



祈
り
を
つ
な
ぐ